



人生

富岡貴林著

發明道中記

二編

下

No. 19 四冊
子部

東京神田區龜町亭目拾遺地

三河屋幸三郎

口 9

1516

4



遠
1516
4止

富岡貴林編

人門發明道中記二編下之卷

第十驛

本然開道質素領○卷

村ハ人物をえ込○

は度にかま○律本林

○実亭ハ持系乃○

つる半○

開道ハ國法とわ



後明道中記二編下

守りて。途まじつろく
 まふ朴めく。穩うろ。假
 にも猶素を好む。費一と
 もふき。老より。為惡ふく
 令。張。財。宝。を。ほ。ど。じ。し。意
 と。相互。ひ。り。人。の。宙。と。
 ゆ。う。の。形。と。飲。ぶ。風。俗。と。
 ○。其。飲。村。ハ。系。身。に。授。



飲村
 系身
 人



右 若開道
 左 惡街道

儉約宿
 格番宿

か。ぬ。福。と。新。の。所。多
 ○。以。本。より。あり。○
 潔。白。山。○。飲。の。境。の。所。
 右。岐。道。より。○。若。開
 道。ハ。儉。約。宿。ハ。惡。街。乃。ハ
 格。番。宿。ハ。い。づ。る。あり。此
 二。道。ハ。入。口。を。能。く。似。た。る
 道。り。て。ち。ろ。ろ。と。あり。し

連るるや。能く
 思惟く通行す
 ○凡此質素領儉約の
 道は。第車つばまやの
 けしき。費をさふま
 け。身衣食を落し
 けしき。非常の備一と
 容へ。親類縁者の実



けしきを授け。集りてを散らけり。飯り何處かある。捨て
 ざる。ほらけり。人ふ。さしづも恨む。取て。我れ。約ま。るに
 取り。姓を散らす。をさ。満さる。類。と。是あり。茲み
 玉り。悟。番。の。人情。を。さ。公道。り。替。む。き。飯。の。さ。る
 眠。る。み。強。は。我。れ。是。を。散。ら。け。を。さ。る。に。貪。り。取。り。て
 飽。る。あ。く。ほ。ら。け。る。を。思。ひ。次。に。恥。を。知。り。て。織。里。を
 以。と。り。ず。利。の。あ。る。り。行。ひ。を。汚。穢。に。等。の。さ。る。ひ。や。わ。わ。
 雲。泥。里。の。あ。る。か。く。と。謂。つ。屋。に。お。も。ひ。得。り。と



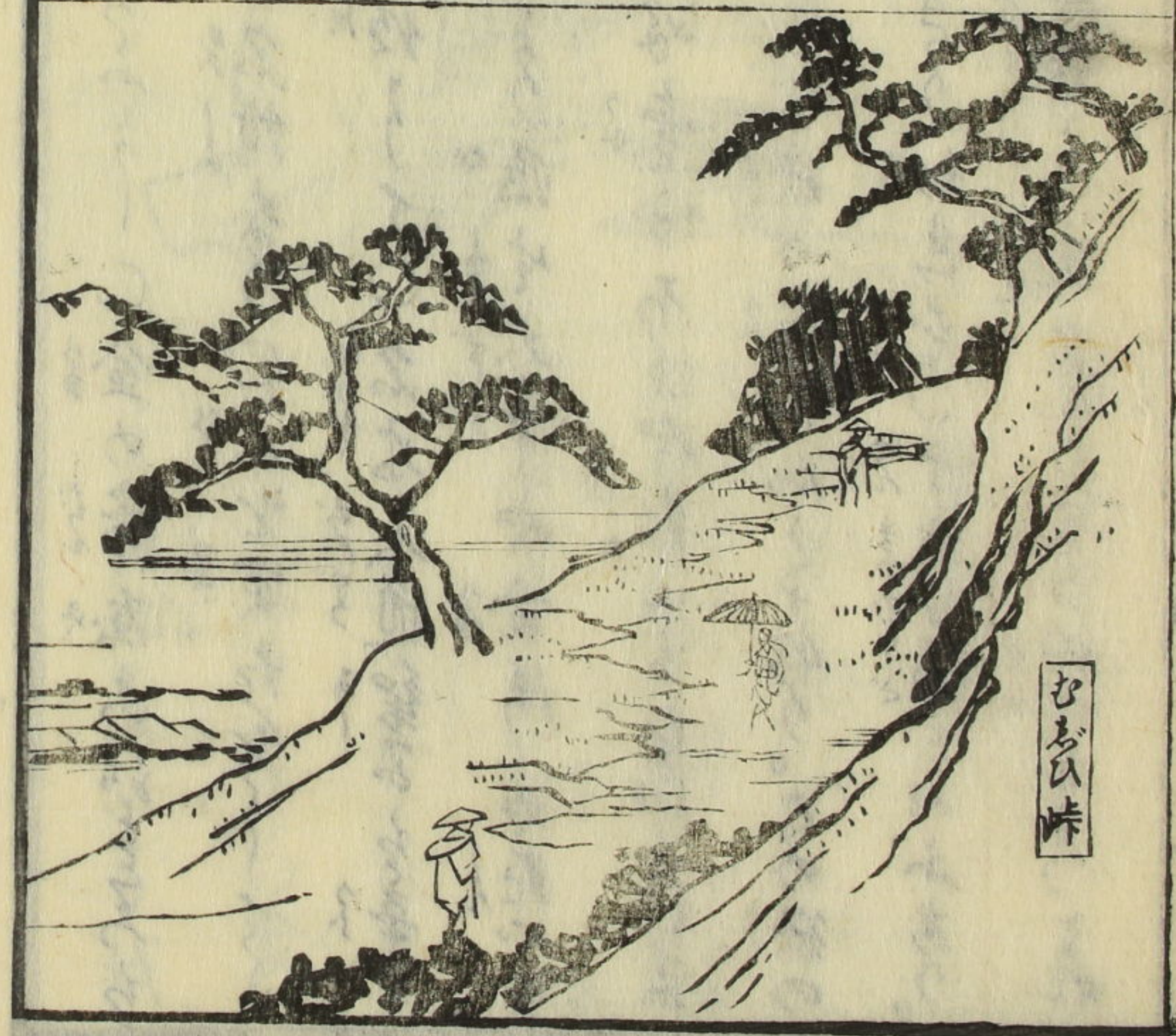
混じりく

第十回

無街道○歟の境ひ那○
 機嫌買宿○宿の梅鼻
 つれ合なり乃村あり。此
 なる人通知るにみそ
 畜類同やうなり○食
 たり酒比ふにみそ

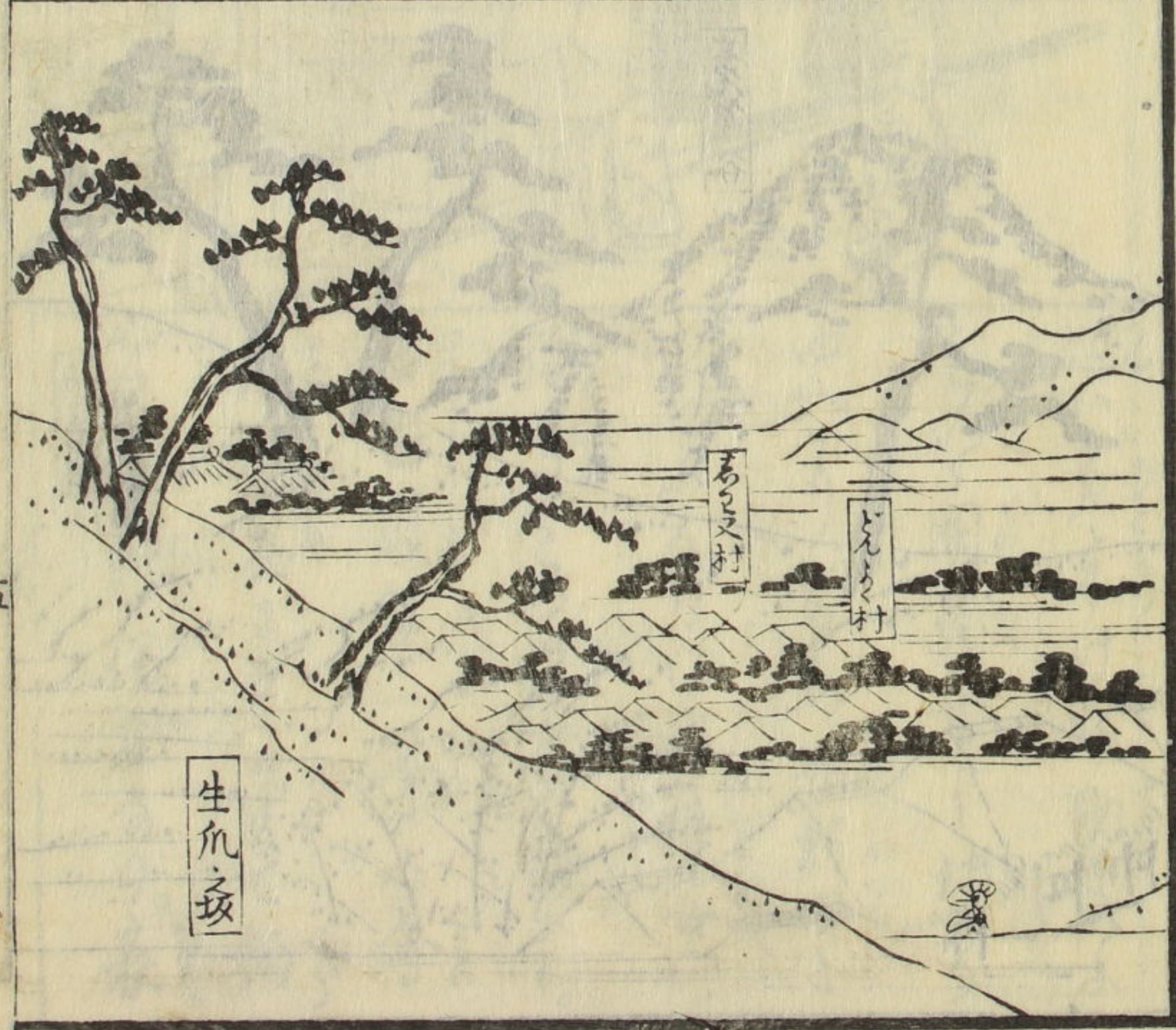
土俗に邪見屋ともいふ。○金の番屋あつたと云ふ
 凡の先より其を燃え名所あり○人を突たせしむ
 金に欲しむものありて○名も人道を離れを幸く
 し食を以て○ありより後生大事や金何や死でも
 命のあるやうり。嗚呼命をがりや死ともなふといふ
 ところなり○朋欲ぢへ○歟の河みかゝるなり。この歟の
 河面ひろむる事かぎり知れど○千枚張田といふあり
 米一粒拾ふ一俵も二俵も取あふところ田北あり○これ

より元為悲味このいふ
 ○慈の賜多く懐く
 いづみ来ふあり。其の
 なる眼もさうく凡そ
 つのむと放さぬ性らぬ
 みく。あらんをも唯ち
 起ぬ義理しらぬ世間
 知るはありてさうぞ此



むらた

歌の流い。儉約道悟書道
 と紡造やま。儉約み
 懈るべし。進む。進む。進む。
 悟書み入海。入海。入海。
 戒むべし。○生凡の坂。○
 貧林村。村。村。村。村。
 なく法を守らぬ。守らぬ。守らぬ。
 けり。理非を。理非を。理非を。



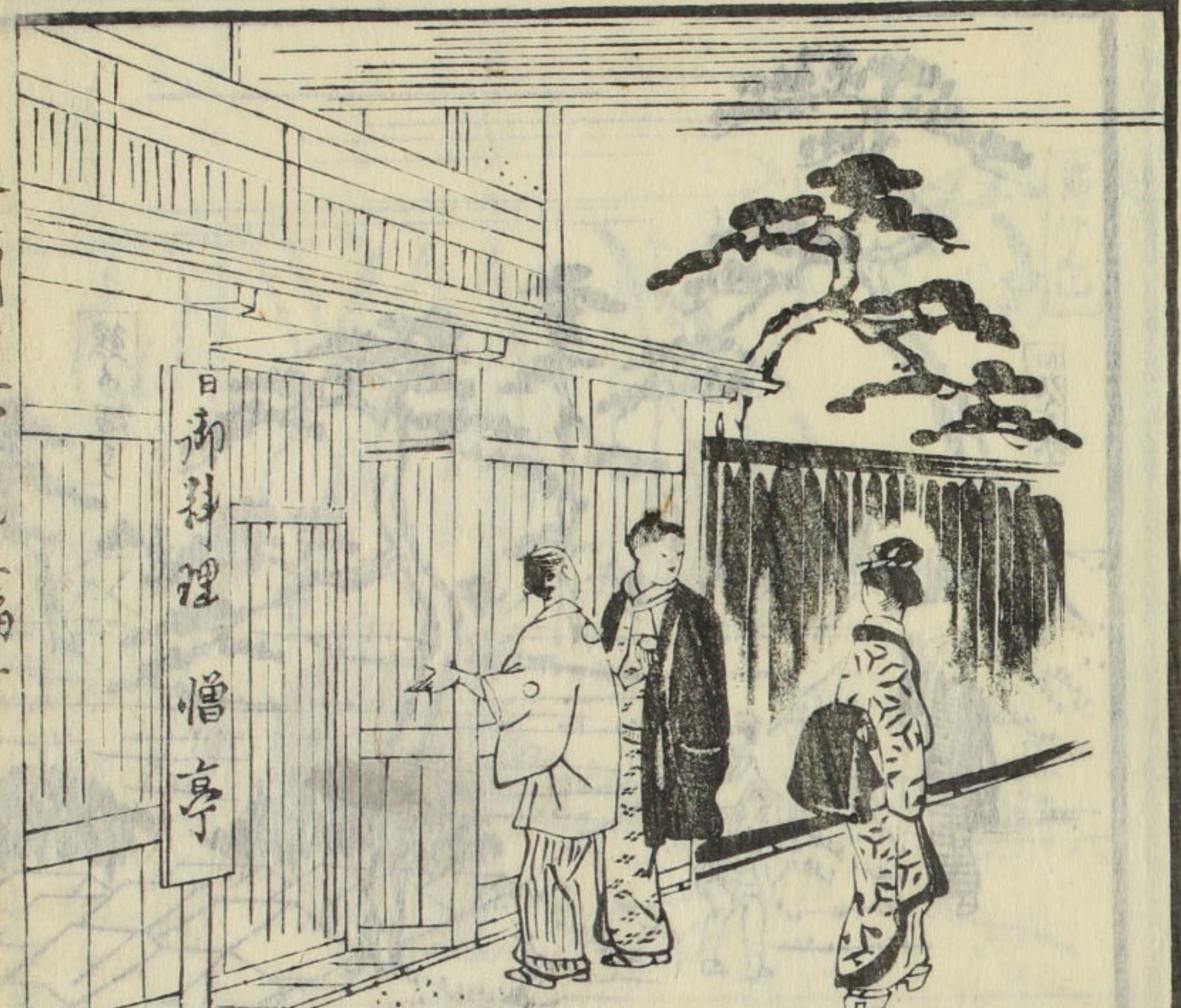
生凡の坂

是文の神をそのりて
 もはつひふとふふ名所
 あり○悟又村あり
 小大欲天と安を
 悟又の大欲とを申の
 目々。迎々隣村より来
 諸人おびたし
 あり○欲づつ因



くち田
けち田

吉谷

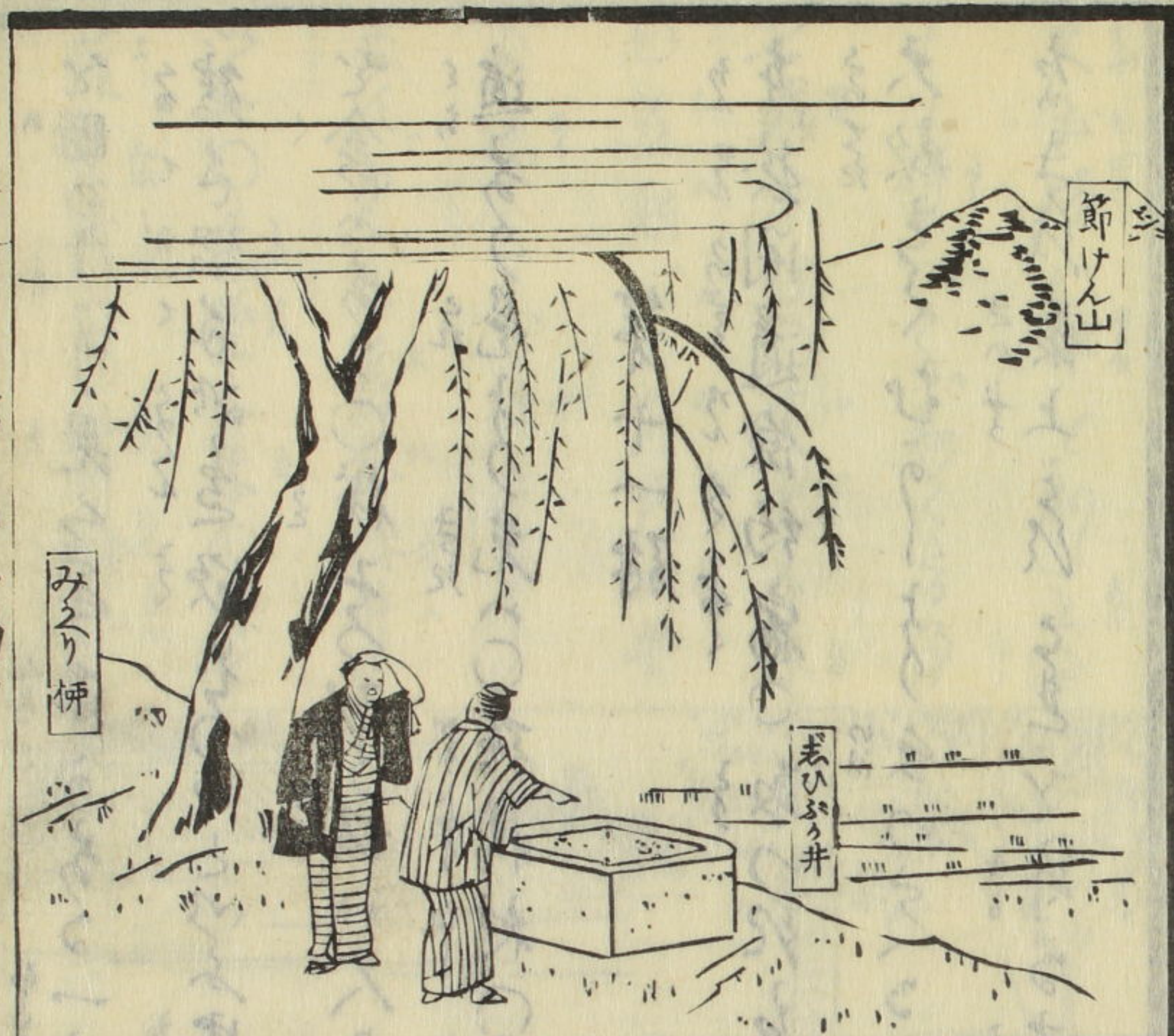


日御料理 僧亭

迎ハえ来けち助といふ
 もの開敷せ地あり。
 ゆりりあり女新田と
 といふあり○悟持谷○
 悟持谷の増真といふ。
 悟持道第一等の舎
 席茶屋ありくまて面
 せり料理あり。表



おきい者^{おとこ}と^{いふ}やうけ
 衣類^{いふ}子^てた具^うを飾^きり。
 身^みの分限^{ぶんげん}を^し知^しるに
 秘^ひあは^れもの^とを^いず^るあ。
 松^{しょう}門^{もん}り^の縮^{しゆく}袖^{そで}を^いず^る
 世^よの^う道^{みち}に^おも^はす^く
 子^こを^いず^る人^{ひと}の^い横^{よこ}に
 建^たつ^てね^る人^{ひと}情^{じやう}と^いふ^は難^{がた}と



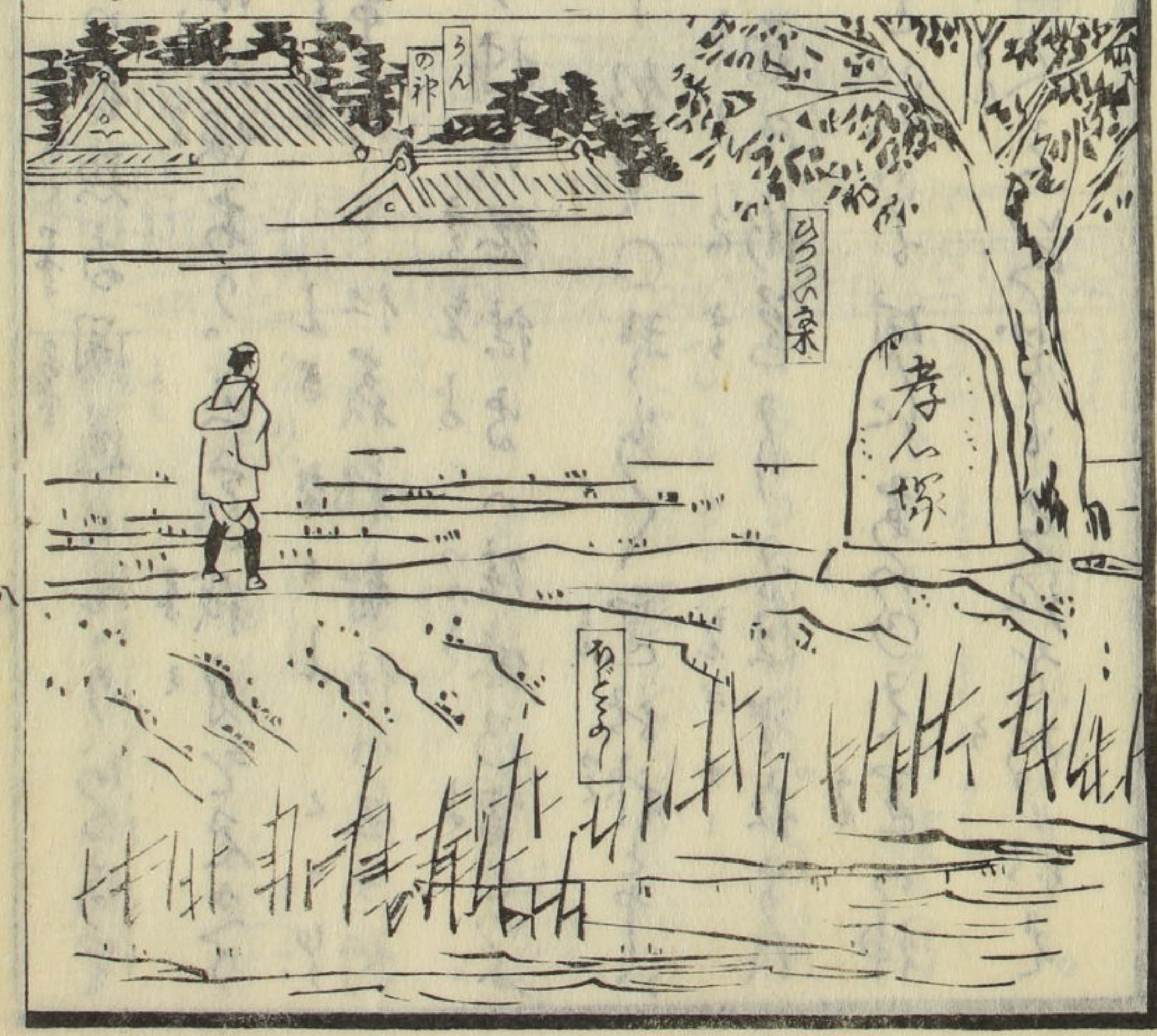
往^き家^け料理^{りやうり}ハ[○]赤^{あか}に
 ○^い振^ふり^あろ^う○^い何^{なん}に
 生^な姜^がを^い用^{もち}ひ○^い中^{なかつ}
 一^い注^{しゆ}吸^{しゆ}の^い○^い酒^{さけ}ハ^い
 前^{まへ}廻^{まわ}る^い獨^{ひとり}りの^い
 込^ころ^いを^い大^{おほ}き^いに^い研^{けん}ふ^い
 他^た人^{ひと}の^い目^めり^いハ^い知^しる^いの^い
 如^{ごと}く○^い高^{たか}勝^{かつ}坂^{さか}より^い人^{ひと}

七眼の下り見くす思ふある一様一あり○高橋坂○
 熊毛橋を此を欲むると思ふ思ふあり○何うか思ふ
 七食ふあり○横たふあり坂人よりくあり独りて行
 道あり是より先へ○強情村○頑愚村と云ふなり

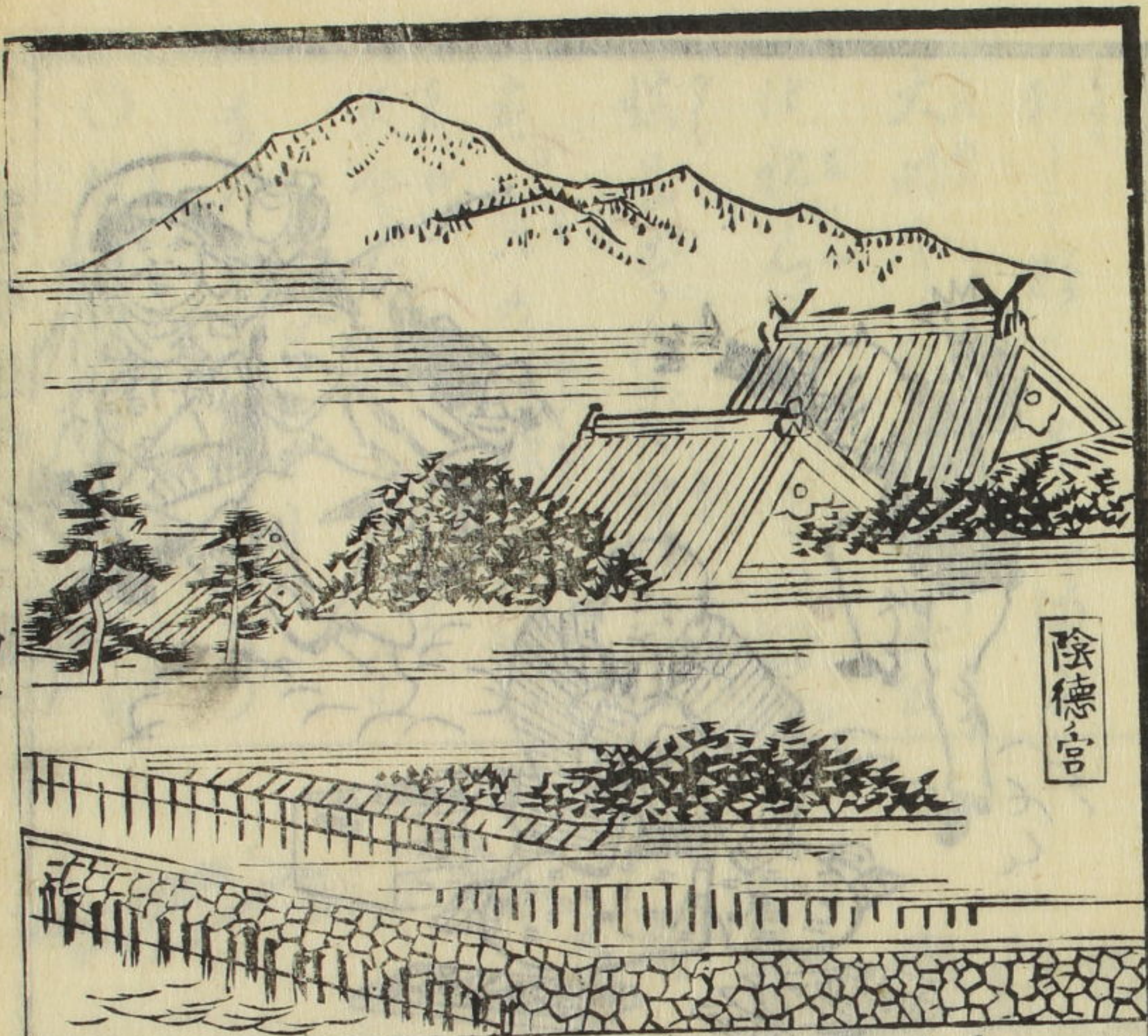
第十一節

本然開道儉約篇○取つれら中取坂。その坂の
 大歌とくむのより云つて所あり。夫人世やん
 なき成衆上と云ふと守る事といふを難し。

又出俗ハ車々お上る
 一様云へく。あつてある
 七戒む○中取坂本
 ○慈恵心の井戸は井
 七来くふはききき
 七人ふ慈恵源井と
 七○失墜本○ほど
 七生茂る○常儉山○



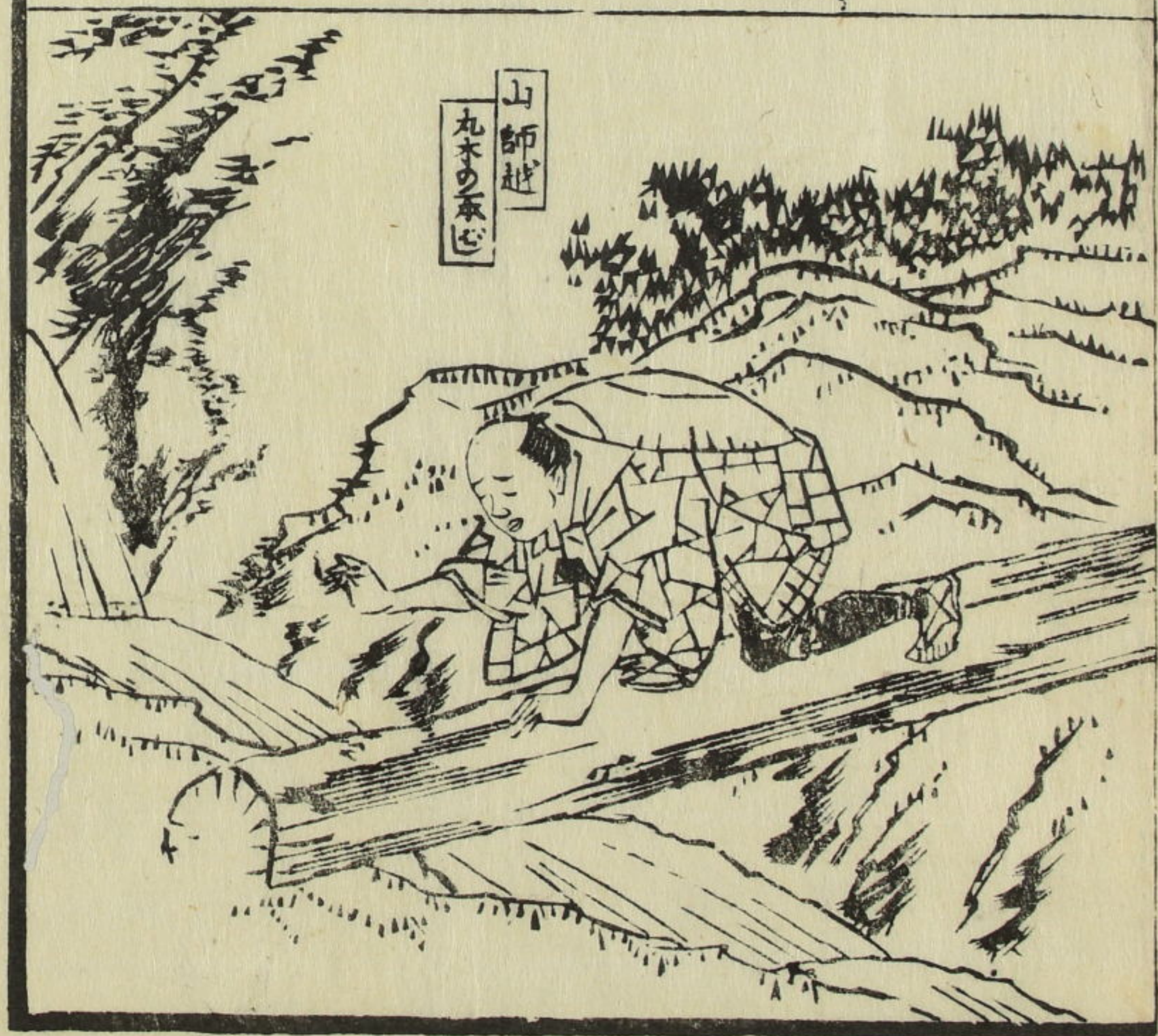
運えんの神かみ乃も社やしろの神かみ社やしろハ悪わる悪わる為ため開道かいどうともりはるあまる
 ○當山たうざんの半はん腹はらりき者もの人ひと塚づかあり。二ふた石いし我われ身みをえんふり
 柳やなぎ乃も大樹たいじゆ何なん里り○五ご常じやう村むらもも仁義にぎぎ礼れい智ち信しんの五ご々さ村むら
 結むす組ぐみ合ああまる。南なん五ご々さ村むらの惣そう惣そう守しゅハ陰徳いんとく乃も宮みやともふ
 あまも運えんの神かみ乃も家いえ一ひと軒けん里り○勢せいももくく運えん結むす神かみともハ
 本ほん惣そう開道かいどうともええより。悪わる徳とく街まち道みちりりもも結むす守しゅ在あるる
 神かみ社やしろははくく。善ぜん人ひとともくく同どうににああるるをを運えんの神かみ
 乃も利り無む少せうく。ままとと悪わる人ひとともくく心こころももどどれれをを結むす守しゅははる



陰徳宮

一旦いつたんも運えんををひひくく。
 或あるははくく又また南なん徳とくのの身み
 ととああるるももああるる。そそれれはは我われ
 天運てんえん脩しゆ環わんををるるややいいと
 あり。ああののああれれどど悪わる
 人ひとののああ唯ただ一ひと回かいとと。
 奸偽けんぎのの節しやく炎えんとといいははるる
 邪よこしま一ひと中ちゆう結むす守しゅははるる。

出丸あり。南側の後を
 ○獨信知が嶽たう
 得一要害を双の城郭
 あり。又この獨信知い
 牙の陣くくとおろ
 ちれども。虎人のいり
 とえい。おろし
 難き君子の陣郭はし
 く。尋常の企て及ぶ

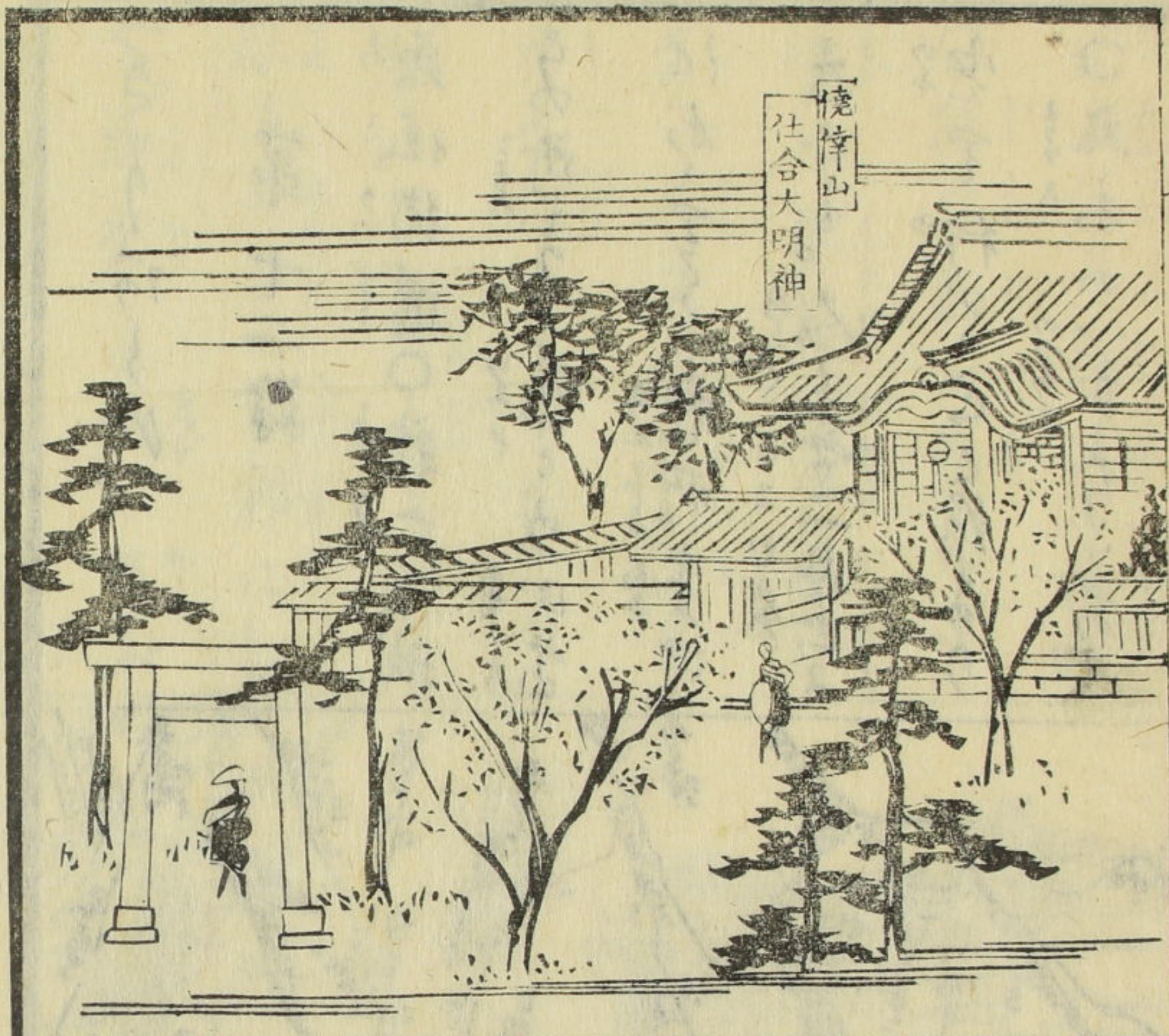


きりり何くべ。

第十二回

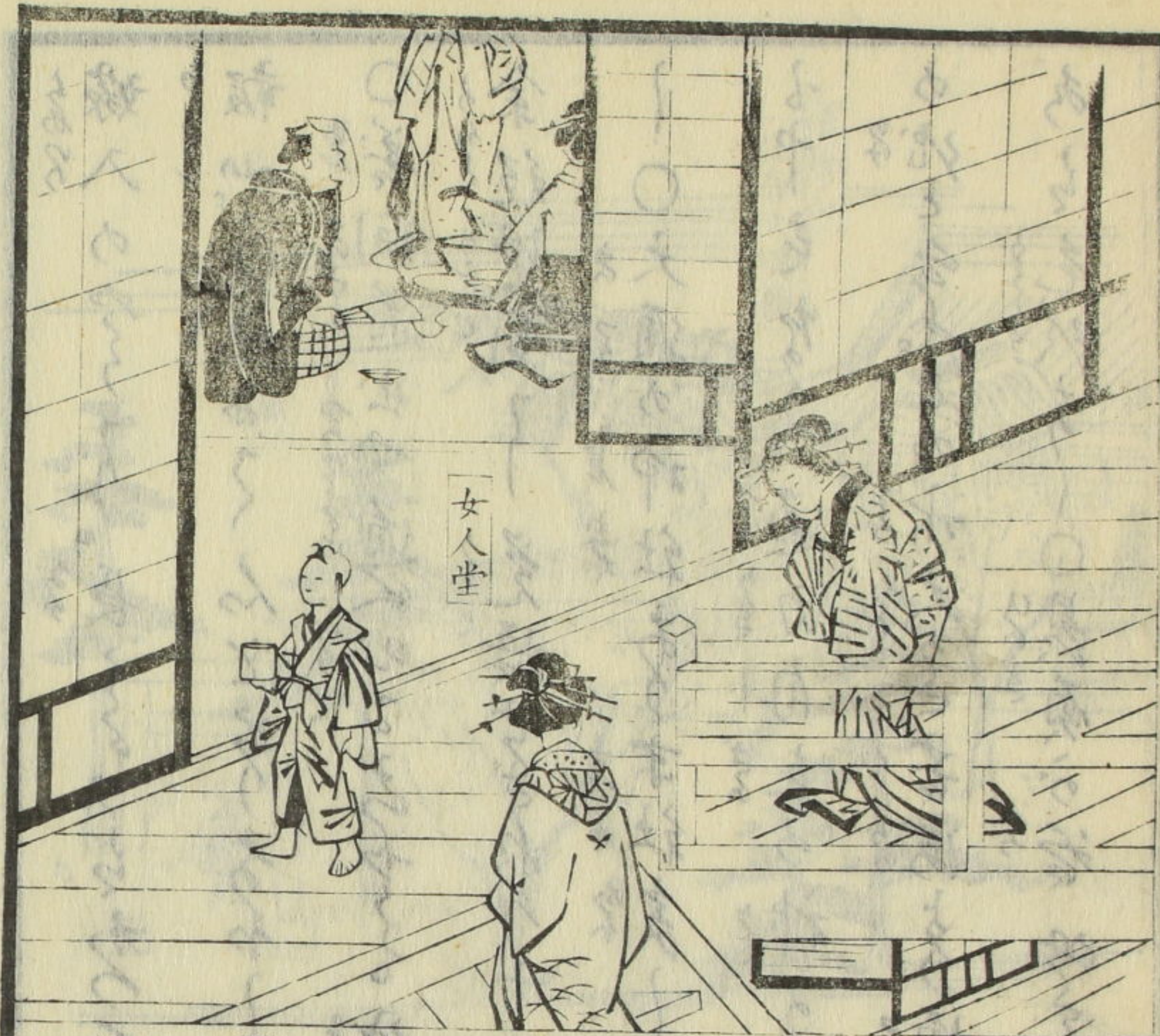
悪徳御道○邪正仕裁
 ら所より色々の山道
 にかまき。精所多け
 きむも。人々を二をよ
 宅を行くところあり
 ○丸木の一木あり



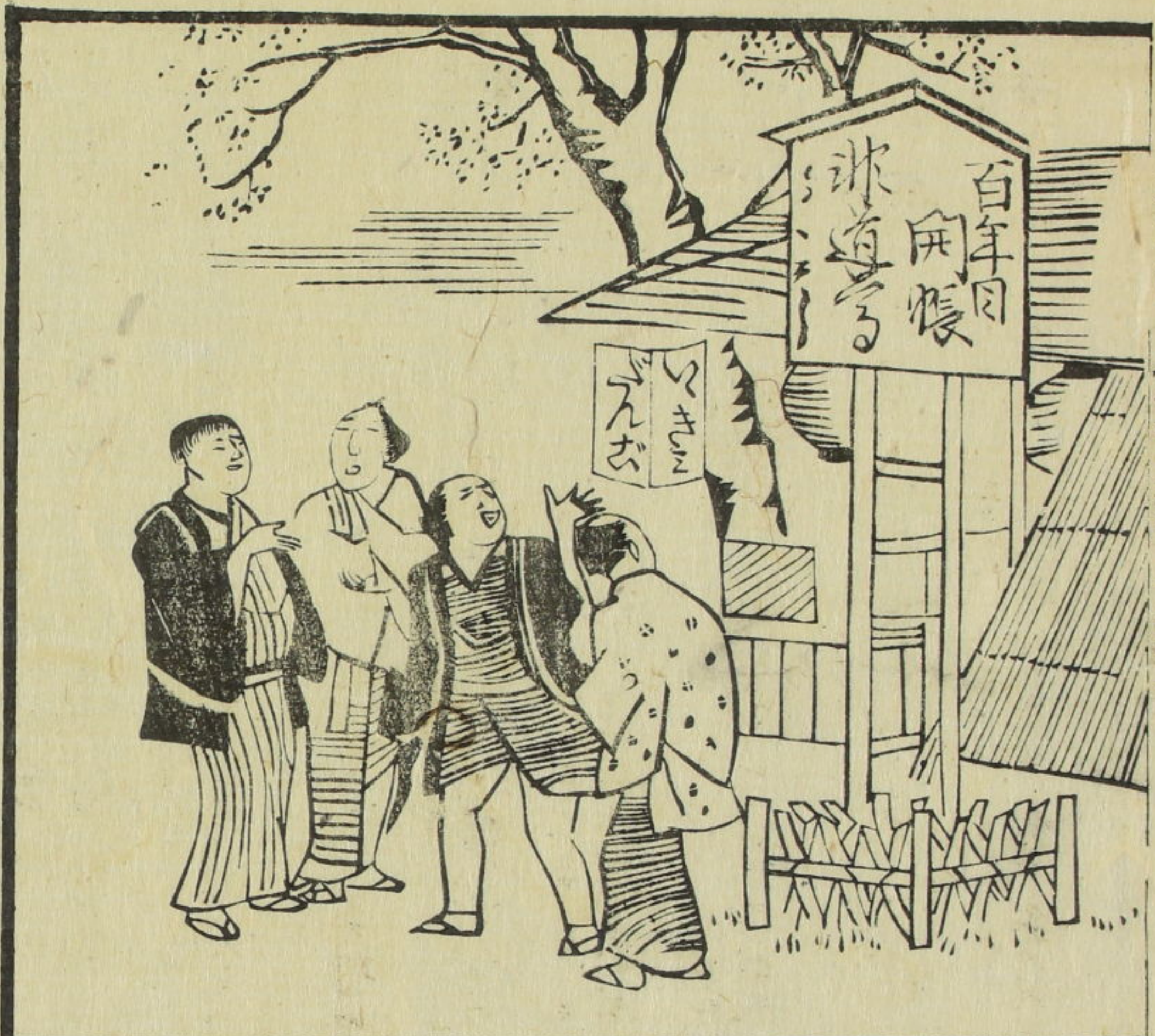


此橋を踏むが其忽ち
 ○自り谷へ落ちるなり。
 此山を登るに
 行きあやせよ○倭偉山
 仕合大明神の前へ出。
 利益をかうむるにされ
 ども一回りて。秋の夜
 の如くやと。貧乏人の

嫁入のやうなり。長とらふなりとあるべし。○果
 報心。この地みくんとありあやし。正直一べんにあるに
 ○善開道出世道之出るあやも。稀くみいあるなり。志に
 余経望固く。覚悟せざれば十り八九はおぼへるに
 一○大通の神社あり末社多し。土人牙傍の明神と
 もやをなり。通力自在の神なり。てあるなり。○賛
 の池と云ふ。この水大く。若海より涌出る。流水あり。清く
 ある。色淡なり。○泉原の谷。此のハ。○本善開の末

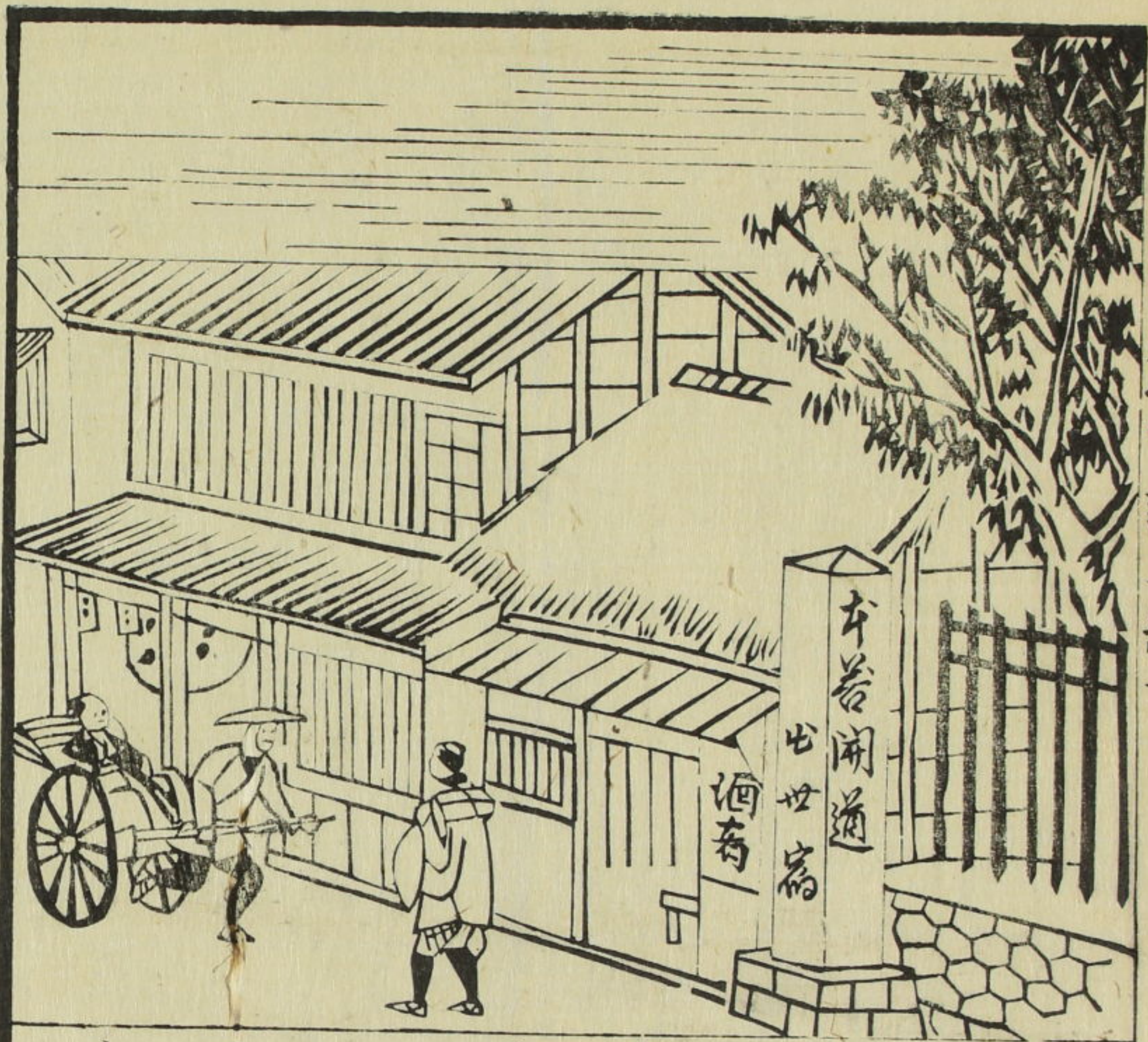


山つり やまづり くらゐ くらゐ なる なる 表 あらわ 道 みち
 あれど あれど あり あり あり あり ぬ ぬ 取 と
 あり あり ○ 女 おんな 半 はん ハ ハ ら ら の
 ひ ひ ぎ ぎ 谷 や の の 陸 りく 程 ほど ま ま う。
 其 その び び れ れ へ
 其 その 災 わざ 震 ふる 目 め を を お お づ づ け け し
 總 そう ひ ひ と と 花 はな を を 結 むす 締 め ま ま う
 ○ 此 この 世 よ 社 しゃ の の 立 た 身 み 出 で 世 よ の
 美 み 道 みち 宿 しゆく 宿 しゆく と と あり あり べ べ 初 はつ る



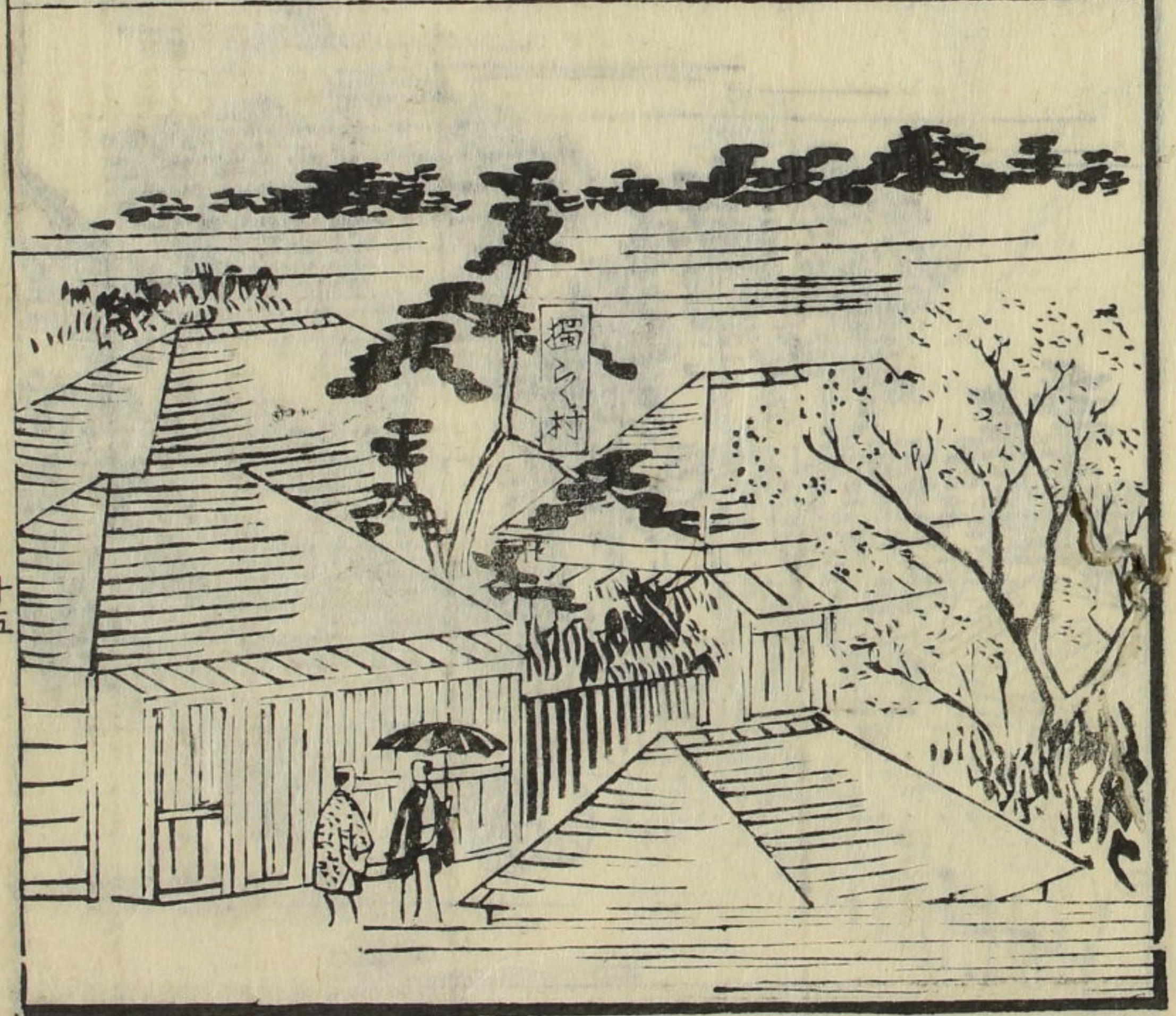
こそあつては是より
 ○何んまりの洞ある
 此の屋あり○新築
 此の屋あり○ちるも
 脊の脊あり○あん
 かり脊の二脊あり
 此の屋あり
 始めより格闘を
 然る

人を以て積貯するを
 消えつゝい果して武
 なくともやのり何
 網りて色氷道の報
 ○名物といふは圓
 ○大さな換若なり
 何なりものやにあ
 難うもつゝは乃安
 難うもつゝは乃安

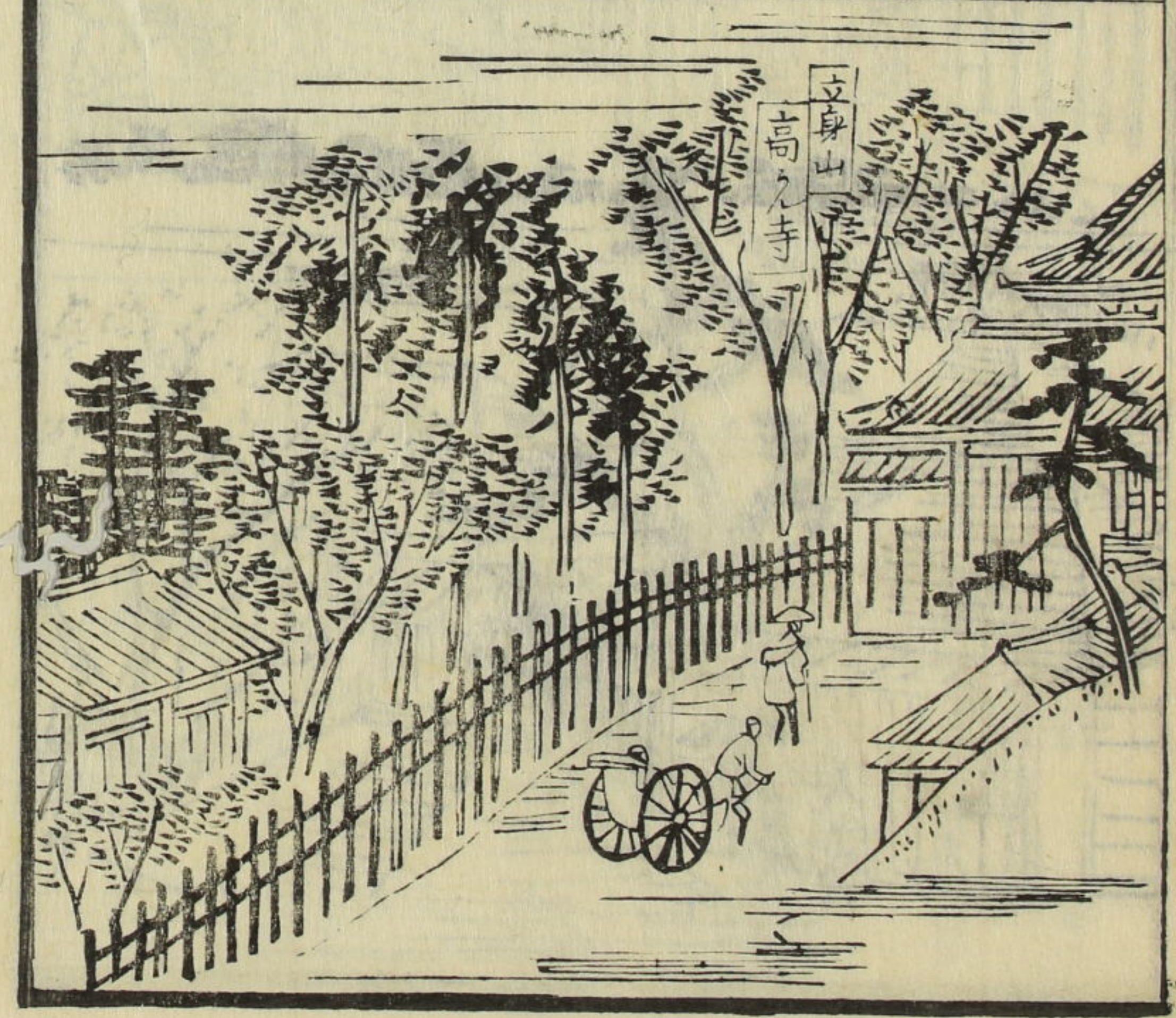


其の傍に裸體ありて
 立ふあり。何と大
 きに換然と云ふ。○物
 下り坂。此よりして○同
 果忘報の天罰を信ず。
 第十三回
 本番開道○出世篇
 の所並にありて。

この町幅狭く。途々
 く地平らう。て海
 丁寧ある所あり。あ
 高き入口より少く
 あり。此より入る
 ○獨り村と云ふ。わ
 風流な村と云ふ。わ
 中を走りて。一か

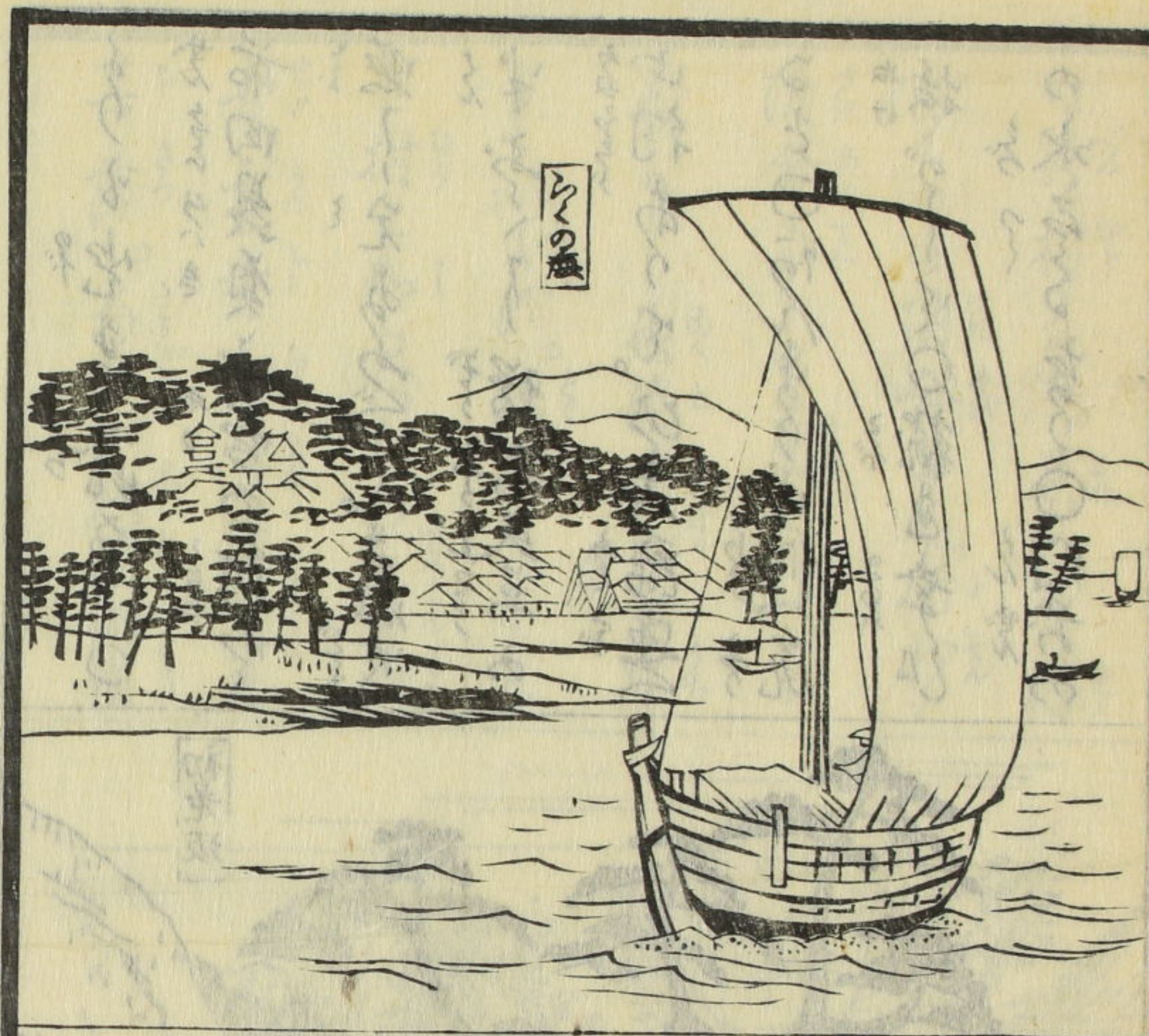


のふ村あり。是ハる村
 づもの附合りて。他おと
 附合るまど交りあ
 あり。一徳徳街屋の中
 あり。此の徳徳街屋の中
 き村とある。一〇身
 青雲寺本堂へ入る
 菩薩。あふ徳徳街屋



あり。此の徳徳街屋の中
 前四段真の客の新
 照一光あり。され
 半ふり。増長天玉の
 山祠あり。ひと踏
 ると〇何んまりの洞へ
 援け。〇徳徳街屋
 の水なるなり。〇門





何り名物○花りあふを
 あくまう○初老の恨
 ○飛の甲より幸の功
 勝あり。此坂よりくく
 青空をみ下るる。ゆ
 京色ある雨あり○五
 の塔あり。天をみる
 来る健立ちありとこのや

○此辺金のかき木のかき
 と○四十八瀬越○浮世味
 見ゆる此境より演る
 出る○海路を往る。若
 の浦○工次が海はより
 此岸あり。此海岸の
 海と云ふ。茲を渡りて
 るよかゝる雨はしるは



○若くは積りて、（うき）海を渡るといふ。あつたつて、（い）なり
○又より、（い）陸地の浦へ、（い）あつたつて、（い）浪風うぬいとくめどき
海系あり。此陸地のうきに、（い）陽報の表あり。尚浦へ、（い）岸
して、（い）丹田は、（い）つき○脩身寺家の安楽園、（い）中、（い）開
たあり

○二編迎き、（い）福を授け、（い）發見を待つ、（い）以後を、（い）おふ

招え、（い）教白

發明道中記二編卷之下終

官許明治八年三月廿日

東京

文々堂藏版

發兌

馬喰町貳丁目

木村文三郎

浅草須賀町

書肆

山本莊兵衛

